

養護学校の卒業式で 自宅近くの普通中学校長が毎年のように口に通うことになった尾にした言葉を尾上浩二(53)はよく覚えてい「差別でつらい思いをしても、にこにここと笑ってやり過こせる『かわいい障害者』になりなさい。社会に負担を掛ける障害者は日陰

わが子よ

第1部 出生前診断 歴史編⑥

で生きていくしかなあいつつだ。尾上がこ仲間はみな苦笑いする。念書取られ中学へ

は何の配慮もしないといことだった。音楽室は校舎の4階にあり、普段使う教室から離れていた。10分間の休み時間中移動できず、尾上が着くころにはいつも授業が始まっていて。ある日、ラグビー部

人生の支えになった言葉

「もっと開き直れ」



障害者差別解消を訴えるイベントで、旧知の仲間と語り合う尾上浩二(左から2人目) = 8月25日、大阪府阪南市

の同級生が声を掛けてくれた。おおい、音楽室までおぶって行つたわ。いや、ええつて。何言つてんねん、水くさいこと言つな。その日から、5、6人が毎回、交代でおぶつてくれるようになった。体が大きくなり、小学生のころより歩けなくなっていた尾上だが、誘ってくれる友達がいるからレコードを買いに街へ出掛けることもできた。だが高校から大学へ進むころ、尾上はもんと悩むようになった。アルバイトなどをろつと障害の克服を自ら通じて障害者に対する指すのではなく、障害社会の壁を感じる機会が増え、将来に不安を抱いた。足をひきずつて歩く自分に負い目もあつた。そんな時、ボランティアによる24時間介護を受けアパルトで生活していた男性と知り合い、自宅に遊びに行つた。そこで言われた。おまえは障害者として開き直りが足りない。昔のことを話して街を歩けば差別がある。関西弁になつて向こうからやってくるんや。負けてしまつぞ。ありのままの自分。1970年代後半。自分と同じ脳性まひの人たちが、健常者中心の社会を変えようと運動を展開していた。「命は等しく価値があるのに、無意識に『生

た。体が大きくなり、小学生のころより歩けなくなっていた尾上だが、誘ってくれる友達がいるからレコードを買いに街へ出掛けることもできた。だが高校から大学へ進むころ、尾上はもんと悩むようになった。アルバイトなどをろつと障害の克服を自ら通じて障害者に対する指すのではなく、障害社会の壁を感じる機会が増え、将来に不安を抱いた。足をひきずつて歩く自分に負い目もあつた。そんな時、ボランティアによる24時間介護を受けアパルトで生活していた男性と知り合い、自宅に遊びに行つた。そこで言われた。おまえは障害者として開き直りが足りない。昔のことを話して街を歩けば差別がある。関西弁になつて向こうからやってくるんや。負けてしまつぞ。ありのままの自分。1970年代後半。自分と同じ脳性まひの人たちが、健常者中心の社会を変えようと運動を展開していた。「命は等しく価値があるのに、無意識に『生

この連載を読んでの感想や、ご自身の体験を「わが子よ」取材班までお寄せください。ファクスは03(6252)8761、電子メールはsha.waga.koyo@kyodonews.jp

第1部終わり (敬称略)